

辻山幸一新派を語る

——神戸在住レコードコレクター辻山幸一氏への聞き書き——

飯塚恵理人 大山範子 辻山幸一

辻山幸一氏は長年、神戸を中心とした関西圏でSPレコードを収集してこられたが、その過程で数多くの芸能関係者と関わられた。今回はその中で「新派」の俳優達について、2020年10月に大山と飯塚が辻山氏宅を数回訪問、聞き書きを試みた。

本来ならばこの時の聞き書きメモを取りまとめたものを本稿とすべきであったが、インタビューの内容が多岐に涉ってしまったことを考慮された辻山氏が、インタビューを補足する内容の手紙を複数回、飯塚に送って下さった。その内容も適時、本稿に加え、さらに不明な点については直接電話で辻山氏に確認を取った上で書き加えた。

市井の研究者であり、レコードコレクター、古典劇・古典音楽の愛好者・後援者であり、新派の俳優であり、事務局も務められた故丸井不二夫氏と、辻山氏は親交があった。辻山氏は丸井氏の没後、多くの新派舞台のβ-ビデオテープをご遺族から譲られている。また本稿で出てくる「年表」は、丸井氏が編纂された「新派年表」のことである。これについて辻山氏は、

丸井さんの編んだ「新派年表」、「あとがき」にある様に丸井さんの労作です。他に伊和井康人さん、加納正美さんも手伝って頂いたとありますが、これは丸井さん無くしては出来なかったと思ひます。と言ひますのは、156頁の昭和11年2月の神戸松竹劇場の井上正夫・水谷八重子の公演を例にとりますと、関

西での演劇公演は大阪から西の公演は神戸がスタートになります。その筋書番付は日・月及び劇場名が入っていません。つまり使い廻し用といふ所です。ですから年表資料の役にたたないものが多いのです。戦前はそういう型がとられていました。それが多い資料を駆使しての年表の作製の苦勞がしのばれます。年表からは関西における新派の大阪での衰退が手に取るようにわかると思ひます。それが都築文男の関西における新派の残党を連れての満州行きと取ることが出来ます。

200頁にのぼる「新派年表」は丸井さんの残した仕事には頭が下ります。

と12月3日付の手紙の中で述べておられる。
(次段落は辻山氏からの手紙を編集したものであるが、戦前の事項については上述の年表に拠るところが大半であり、それについてはその都度断らない)

昭和10年代、都築文男、梅野井秀男、中田正造、笈川武夫らは「関西新派」として、東京の花柳章太郎、喜多村緑郎と袂を分かち、大阪角座や神戸松竹劇場で独自に公演を開くようになっていた。辻山氏は、年表の昭和12年2月「新派創立五十年祭」(東京歌舞伎座)の連名欄に大阪新派の俳優の名がないこと、同年3月の大阪歌舞伎座の「新派創立五十年祭記念興行」も同じであることを指摘された。なお同年3月の大阪角座では「関西新派劇」が「新派創立五十年祭」として「良人の貞

操」「書生の犯罪」を出している。「都築や梅野井は昭和11年から角座で興行し続けているので、すでにこの頃には新派は東京と大阪に二分していると思う」と辻山氏は推察された。また「年表を繰ると、昭和も20年近くになると大阪の新派も戦時色が強まって、大劇場の閉鎖から新旧合同での公演となっていくのがよくわかる」と言われる。後述するが、都築文男は昭和20年に「戦時慰問演劇班」として一座を率いて満州に渡り、残った梅野井秀男らは往時の隆盛を取り戻せず関西新派は終焉となった。ただし辻山氏は「関西新派の戦後の生き残りは松竹新喜劇に進んだのではない。例えば新派の役者であった藤山秋美は藤山寛美の父親である」とも指摘されている。

辻山氏は、丸井氏が新派を回想した録音テープ「丸井不二夫新派を語る」をご遺族から提供され、今も所持しておられる。これについてはいずれ「メディアと古典芸能研究会」でデジタル化・活字化の上、内容を報告する予定である。

上記の条件に従い、辻山氏が新派について語られたことを、以下、俳優ごとに姓名あいうえお順でまとめた。

文章は適時、句読点を補う、旧仮名遣いや異体字を直す、文体を統一するなど最低限の書き換えを飯塚が行った。(聞き書き)は聞き書きメモ、(手紙)は辻山氏からの手紙を表す。

・市川紅梅（三代目市川翠扇。父は五代目市川新之助）

私と新派との付き合いは、家の中に時々置いてあった仙花紙の筋書番付に、「新生新派」の文字に左に一段下って「市川紅梅加入」の文字があったのが印象に残っている。第二次大戦後、国鉄の窓ガラスが板で張られたのがやっとガラスに変わった頃、昭和24、25年の頃だったろうか。(12月3日付手紙)

・市川翠扇（二代目）

「旅役者お梅」は翠扇が花柳没後主役として残した舞台である。この人は年表を繰ってもシンになる役が少ない人で、九代目団十郎の血を引く（飯塚注：長女）ということなどもあり、何か気の毒な気持になる。(11月23日付手紙)

・井上正夫

四国の出身の名優。伊予なまりの人。とうとう見る機会のなかった人。(10月31日付手紙)

新派には歌舞伎の影響下の、良くも悪くもそれを引きずった人達と又それと違った新派の二派に分かれると思う。そう言った点で井上正夫はむしろ新劇というジャンルに属した人だったのではない。丸井さんのお宅に伺った時のことだった。ブロマイドを見せて頂きながら説明して頂いていた時のこと、丸井さんの女形の姿を発見して、どんな役でもしていたのだなと思って見ていたのだが、そこに奥さまが入ってこられて「こんな役もしてたの……」「何でもしなけりゃならなかったもの」の遣り取り。奥さまが部屋から出られたあと、ひとり言の様に私に言われた言葉。「『井上先生がこれからは男の役は男、女の役は女がする時代だよ』と言われた。それを聞いて僕は女形は止めたんだ。」井上正夫という人は丸井さんにもこういった形で影響をあたえたというバックボーン的な存在であった名優であったのだなと思う。丸井コレクションの中の「名君行状記」初代市川猿之助との息詰まる遣り取り、いいものが残っていたと思う。(12月12日付手紙)

・梅野井秀男

都築文男の満州行きに参加せず、(新生)新派にも入らずに残った。晩年は、私が中学生時代だったか、母が言った「あの人は二流の人」という証言がある。旅廻りに堕ち、電柱のポスターで見た覚えがあるという丸井さんの「俳優鑑(かがみ)」(飯塚注：飯塚は未見)の文章とも一致する。(12

月3日付手紙)

・織田政雄

井上正夫の弟子（違っているかもしれない）。映画の名脇役だった。何とも言えないいい味の人だった。（10月31日付手紙）

・金田龍之介

大阪の新劇の劇団「関西芸術座」（大阪の素人に毛の生えた連中の集団の寄せ集めが母体）の頭株の一人。打ち出し前の霧立のぼるなどが主役のものにチョイと出たりしていた。新派の古い狂言に出たら何時も大カスを喰っていたそうで、それほど芝居の道はけわしいものなのかもしれない。（10月31日付手紙）

・小堀誠

戦後ほとんど舞台には出ず、映画に出ていた。そのなかでも印象に残ったのは「夫婦善哉」の父親役だった。船場の旦那ではなくガンコな商売人という役の性根はつかんでいたのを覚えている。（10月31日付手紙）

・高田亘

松竹新喜劇にいた。姿は悪くなかったが、それだけではこの道はきびしいもので、藤山寛美に首を切られてしまった。そして自宅近くの溝に落ちて亡くなったという気の毒を絵に描いたような話。在所が河内の田舎でたぶん大きな溝だったのだろう。今東光のお寺の近くであった。（10月31日付手紙）

・都築文男

一座を率いて大陸に渡り消息不明。関西新派の終焉となる。（聞き書き）

都築文男は、年表によると「S20年戦時慰問演劇班として渡満」とあり、没年は昭和21年1月13日63歳ということだ。当時、噺家でも「日本で

は芸の方もパツとしない」などいろいろの理由で満州へ渡った人がいる。今でこそ「大名人」として記憶されているが……古今亭志ん生、三遊亭円生……料理屋になっていた三遊亭百生（桂梅団次）がそうである。（12月3日付手紙）

・浪花千栄子（2020年11月30日より放送のNHK連続テレビ小説「おちょやん」の主人公（<https://www.nhk.or.jp/ochoyan/>）

一時、松竹家庭劇の座長であった渋谷天外（飯塚注：二代目）の妻でもあった。下町の大阪弁で手八丁口八丁の中年女性役は、役にはまり絶品だった。しゃべり続ける役が得意な役者なので、出てくると主役を食ってしまうこともしばしばだったが、新派を支えた脇役の名優の一人であると思う。（聞き書き）

・英太郎

戦後、昭和30年代まで。「こったいさん」が最後だと記憶している。背が低い女形で私が観たころは脇役専門だった。花柳章太郎の遊女夕霧で大矢市次郎が講師の時、英太郎が女房の役で出たが、出過ぎることなく花柳・大矢という主役を活かしながら存在感を示した味のある演技だった。英太郎でよく覚えているのは水谷八重子の大阪公演で「前夜祭」という催しがあり、客席にいて観ていたが英太郎が小唄を唄った。戦後も新派を支えた名優だと思う。（聞き書き）

・花柳章太郎

昭和28年頃、正月興行が京都の南座であった時のこと。新派の楽屋で風邪が流行し、花柳章太郎もダウンしたが、何と代役が師匠の喜多村（緑郎）。それを聞いて大阪からも見物が押しかけたという話がある。花柳が亡くなった昭和40年1月9日、私は神田神保町の富士レコードの5階から雪がチラチラする外を眺めていた。欲しかった花柳の第一著書「水中花」を豊田書店で手に入れてニコニ

コしていたという、何とも皮肉な本当のことである。三月書房の吉川さん（元々檜書房（現「檜書店」）にいた方）が年末に花柳家に挨拶に行き「何か家がさびしかったのヨ」と言っていたのを思い出す。（10月31日付手紙）

・春本喜好

尾上松助（飯塚注：六代目 故人）というとてもない歌舞伎の名跡が復活しているが、その人の親。一時は花柳章太郎の相手役までしていたのが、当時流行していた映画に出て、帰って来た時は亡くなった大矢市次郎の穴をうめる様な役回り。私もこの人の生の舞台はとうとう知らずに終わった。「俳優名鑑」にはさもさも名優が戻って来たように書いてあるが、私など「TVで見る限り新派の水には合っているが、ウーンどうだろうか？」といったところ。（10月31日付手紙）

・藤山秋美

藤山寛美の父親。関西新派の役者でSPレコードにも出演している。（聞き書き）

・藤山寛美

戦前、新派の子役でスタートし、戦後新喜劇のスター役者となる。戦後まもなく父親に連れられて行った「松竹家庭劇」の舞台で、藤山寛美が当時まだ珍しかったアコーディオンを弾いていたのを観て、「珍しい楽器を弾く面白い役者が出てきたなあ」と印象的に覚えている。（聞き書き）
藤山寛美は昭和4年生まれだから、日本に帰って「松竹家庭劇」に入ったのが20歳前後だろうか。（12月3日付手紙）

・水谷八重子

昭和40年に花柳が亡くなって、それからあとは水谷を柱にして新派は続いて行くわけだ。……昭和26年2月に大阪歌舞伎座での上演記録のある「月は銅鑼なり」なのだが、新派でなく新劇でな

くという芝居で、水谷八重子の主演であった。他に「お蝶夫人」などがある。元々八重子といふ人は戦前で言うところの「新劇畑の人」だから、本能に目覚めたのだろうか。当時、新劇の劇団「民芸」で演出を手がけていた菅原卓を招いて、彼の演出での舞台があり、その頃の一つの狂い咲きの舞台であった。その頃楽屋で「あの人は水谷竹紫の奥さんだ」という人にお目にかかったことがある。水谷の素顔も楽屋に連れて行ってもらったので知った。化粧をするまではお白粉焼けした肌で、低い声で見映えしないことこの上なしなのだが、化粧して衣裳をつけかつらをつけると「ハロー」という美しさ、その横で水谷良重が、中学生ぐらいだったか、いたのを覚えている。古き昔の物語、60年近い昔のことである。……思い出したのが水谷八重子と松本幸四郎の「明治一代女」のレコード全幕。音はいいが何ともツキの悪い代物である。（11月23日付手紙）

・山崎長之輔

レコードは残っている。昭和25年頃、NHK大阪ラジオの第二放送で、30分枠で「名人の面影」という番組があり、それで取り上げられていたので覚えている。「山長」と呼ばれていたらしく、いや何ともくさい新派の芸で、相手役が若水美登里という女形で、それが女・女・女という不思議な役者だったのを、中学三年か高校一年頃に聞いた。（10月31日付手紙）
レコードの声を聞く限り……いや何ともくさい……（12月12日付手紙）

・山田巳之助

NHKの放送劇の常連。よく聞いた。（10月31日付手紙）

・山村聡

何ともいい役者だった。初期・中期のTVでもよく見た。「只今11人」だったか、お父さんの見本

みたいであった。(10月31日付手紙)

・萬代岑子

「関西芸術座」に入っていた。武智鉄二演出の「東は東」で茂山千之丞と茂山七五三の二人を相手に廻して舞台上で語り草になった宝塚育ちの女優。あれやこれや映画にも出ていた。(12月12日付手紙)

・和歌浦糸子

戦前の新派の女優。舞台姿は覚えていない。(聞き書き)

SPレコードを集めてウロチョロしていた時代の話。SPレコードの山をひっくり返すと、どこでも決まって「最後の金色夜叉」が出てくるのですね。もうエエワ」とパスしていたら己のコレクションを改めるとなかったという漫画みたいな話。(12月12日付手紙)

新派の俳優以外の話にも興味深いものがあったのでいくつか挙げる。

① NHK大阪ラジオ第二放送の「名人の面影」は、元々「安原仙三」という人の義太夫レコードの為につくられたと聞いている。その「安原コレクション」は東京の文化財研究所に入った。安原さんと私には、私がSPレコードを集め始めたころ関わっていた増田名曲堂というレコード店にいらしていた、などのつながりがあった。安原さんの息子さんも、洋楽のSPレコードをLPレコードへダビングするなどしてコレクションしていらしかった。お会いした時買っていたらしかったのは、以前からクラシックコレクターのなかで有名だったウラニア盤(ソ連)フルトベングラーのBeethovenの第5番交響曲、確か40万円とか。細々としたコレクターには手も足も出ない話で思い知らされた。(10月31日付手紙)

② 客席からではわからない話。舞台では、例えば役者が二重屋台に上り、それが室内としての設定だと履物を脱いであがるが、次にあがる人が

そっとその履物に釘を打って動けなくするようなイタズラがあった。楽屋のれんが行方不明になるといったようなこともあったようで、これなど私も水谷八重子の楽屋でマネージャーと水谷がしゃべっているのを聞いたから本当のことである。毎日芝居をする演劇の役者と「能楽」の人とは、「楽屋」といってもそういった差がある。(10月31日付手紙)

③ 「花井お梅」の新内でいつも語られている「浜町河岸の段」、他にもう一段あるのを御存知ですか。「お梅自訴の段」というのがあるのを御存知ですか。志賀大掾で一度聞いたことがある。(11月23日付手紙)

④ 昭和も第二次大戦後になるとカメラも大発展して、ほぼ舞台全体をカメラに収めることが出来るようになった。しかし戦前(第二次大戦前)では、幕が下りてから役者が舞台の上でポーズをつけたところを乾板写真に収めているから、「生きてるような死んでるような」という写真になる。極端なのが九代目団十郎の「暫」の舞台写真だ。新派の写真も御多分に漏れずで、花柳章太郎の写真集「花顔」が「動を静止に切り取ったもの」と言えるだろう。(12月3日付手紙)

九代目団十郎の「暫」の舞台写真。客席の人が皆カメラの方を振り返って見ていて、当時は芝居の動きを中断しなければ舞台写真は写せなかったという事で、木村伊兵衛の六代目菊五郎の舞台写真集は六代目がOKを出した写真がブレブレ。同じ様に気になるのが……ビデオテープに残っている花柳の「太夫さん」。あれは舞台中継の録画でなくスタジオで舞台を組んでの録画。終幕での足音の何と耳ざわりなことか。(12月12日付手紙)

謝辞

貴重な談話とお手紙、及び「新派年表」等のコピーを下さいました辻山幸一氏に心より感謝申し上げます。本研究は2019年度高橋信三記念放送文化振興基金助成及び2020年度相山女学園大学

個人研究費（飯塚分）の成果の一部となります。

いいづか・えりと/文化情報学部教授

E-mail : erito@sugiyama-u.ac.jp

おおやま・のりこ/神戸女子大学古典芸能研究センター
非常勤講師

E-mail : ohyama@yg.kobe-wu.ac.jp

つじやま・こういち/レコードコレクター